

子どもの「学び」を創り出す
総合的な学習の時間の進め方

実践ハンドブック

Vol.3 (改訂版)

Q & A編

佐伯市立渡町台小学校

- Q1 総合的な学習の時間に取り組む内容に3年生から6年生までの系統性は必要でしょうか。また、学校で決められた内容をしているのですが、いいのでしょうか。
- Q2 学習対象は、どのように見つけ、決めればいいのでしょうか。
- Q3 総合的な学習の時間では、どのような表現方法があるのでしょうか。また、どのように取り入れればいいのでしょうか。
- Q4 他の教科との関連は、どのようにしたらいいのでしょうか。
- Q5 国語の単元を貫く言語活動との関連は、どのようにしたらいいのでしょうか。
- Q6 ゲストティチャーなどの外部人材は、どのように探して対応すればいいのでしょうか。
- Q7 総合的な学習の時間を意識した教室環境をつくるには、どこに気をつければいいのでしょうか。
- Q8 総合的な学習の時間でコンピュータなどのICT機器はどのように活用すればいいのでしょうか。
- Q9 総合的な学習の時間の評価はどのようにすればいいのでしょうか。
- Q10 思考ツールはどうやって手に入れればいいのでしょうか。
- Q11 総合的な学習の時間の実践は、学力向上につながるのですか。
- Q12 「思考力とはどんなものか？」と聞かれてもすぐにこたえられないのですが、どうとらえればよいですか。

Q 1 総合的な学習の時間に取り組む内容に3年生から6年生までの系統性は必要でしょうか。また、学校で決められた内容をしているのですが、それでいいのでしょうか。

A

- 総合的な学習の時間で取り組む内容について、系統性はあまり重要ではありません。系統性が必要なのは「付けたい力」の方です。こちらは、しっかりと系統性を踏まえた指導していかなければ、子どもの実態に応じた学習が成り立っているとは言えなくなります。
- 取り組む内容については、3年：地域、4年：環境、5年：食育、6年：ボランティアのように大枠を学校として決めておく場合もあれば、すべてを担当に任せられる場合もあると思います。どちらにしても長短ありますから、学校の実情に合わせた対応が必要になります。
- 学校によっては、総合的な学習の時間の内容が具体的に決められているところもあります。そのような場合は、「なぜそれをするのか？」という問いを教師自身が持つことこそ大切です。ただ、「決まっているから」という惰性で実施するのであれば、それほど子どもたちを蔑ろにしたものはないと言えます。
- 本来、決まっていなければならないのは「付けたい力」ですが、そのために、示された学習対象をどのように調理していくかが教師の力量と言えます。どのような学習対象であっても、子どもたちの学びを創り出せる可能性はあるはずです。そのための努力を繰り返す中で、私たち自身の力量が高まり、その結果として子どもたちが主体となる学習の場を提供できるのだと思います。
- 大切なのは、教師が主体となることです。それが、すべての教育活動のスタートではないでしょうか。

Q2 学習対象は、どのように見つけ、決めればいいのか。

A

○ 学習指導要領の解説に例示されたものを参考にして、子どもの興味関心、教師の持ち味、地域の特徴等を踏まえて考えていくことが大切です。中でも、学習対象とするものが探究的な学習プロセスに耐えうるものかという視点は絶対に必要です。

○ 横浜市立大岡小学校では、学習対象を決定する際に、下記のような視点を定めて取り組んでいます。

- ① 地域で学べる。
- ② 豊かな体験活動を繰り返し行うことができる。
- ③ 繰り返し関われる人(専門家)がいる。
- ④ 活動や学びに発展性がある。(探究プロセスのスパイラル)
- ⑤ 発達の段階に適している。
- ⑥ 集団で追究する価値があり、幅があり、深さがある。
- ⑦ 1年を通して追究できる。
- ⑧ 教科等との関連を図ることができる。

十年以上の実践の積み重ねに基づいた、とても参考になる視点です。これをもとにして、各校の視点を追加すれば、見えてくるものがあるはずです。

○ これはと思うものがあればチャレンジしてみましょう。実践しなければ、ふさわしい学習対象であるかどうかは分かりません。大岡小学校でも、初めから簡単に見つかったわけではないと思います。先生方が挑戦→失敗を繰り返し、その中で教師自身のアンテナを磨く中で学習対象を見つける力を養ってきたのだと思います。それこそ、教師の探究的な学習の積み重ねだと思っています。

○ すばらしい学習対象は、みなさんの周囲にたくさんあるはずです。ただ、それに気付くかどうかのアンテナが、私たちにあるか否かが問われているのです。

Q3 総合的な学習の時間では、どのような表現方法があるのでしょうか。
また、どのように取り入れればよいのでしょうか。

A

○ 以前は、模造紙にまとめて発表するパターンをよく見ました。最近模造紙に変わって、コンピュータのプレゼンテーションソフトを使った発表をよく見かけます。しかし、これは使用するツールが異なるだけで、画一的であることに違いはありません。

○ 表現とは、相手の五感に対して刺激を与えることで、目的とする内容を伝える作業ですので、「見る」「聞く」だけでなく、「触る」「匂う」「味わう」などの方法も考えられます。また、「見る」「聞く」だけでも、下記のような表現方法が可能です。

— 見る・聞く表現例 —

実践編(改訂版)IVを参照

- ① ニュース形式で、音声、映像、レポートなどの方法で表現する。
- ② ワイドショーでのランキング発表の手法を使い表現する。
- ③ 紙芝居や寸劇、歌などで表現する。
- ④ 自分たちの考えに対して関係者を集めて行うパネルディスカッション など

○ 表現方法は様々ありますが、どれでも良いということではありません。「誰に対して、どんな内容を伝えるのか」によって、それに応じた表現方法を選択する必要があります。しかし、始めから適切な方法を選ぶのはおぼつかしいと思います。まずは、スキルアップのためにも、多様な表現方法に挑戦させる実践を積み重ね、その中で、各々の方法の長所・短所を理解させながら、最終的には子どもたち自身が表現方法を選ぶことができるように、発達の段階を考えながら、継続的に取り組むことが大切になります。

○ その際、これまでも触れましたが、失敗が大切な経験になることを忘れないように心がけましょう。

Q 4 他の教科との関連は、どのようにしたらいいのでしょうか。

A

○ 関連のさせ方には様々な方法がありますので、いくつか紹介します。

＜前後関連型＞

教科学習をして、その発展として総合的な学習の時間に取り組むような方法です。たとえば、5年の社会で情報を学習した後に、児童会選挙に向けた自己紹介ビデオクリップをつくる取り組みなどが考えられます。

この手法を用いる場合は、教科学習の最後に課題やもっと発展させたいという願いが、子どもたちの中に生み出されていなければ、教師主導となってしまいます。

＜プロジェクト型＞

まず教科や総合的な学習の時間ありきではなく、取り組みたい内容があって、そのために関係する教科や総合的な学習の時間などの時間を合わせて、ダイナミックに活動する取り組みです。たとえば、「子どもにもわかる佐伯の観光ガイドブックづくりプロジェクト」を立ち上げ、総合的な学習の時間を中心に、文章表現は国語、デザインは図工、料理は家庭というように、いろいろな教科等の時間を集めて実施します。

この手法を用いる場合の留意点は、子どもに「この時間は総合、今度は国語」という意識を持たせないことです。そもそも教科の枠は大人の発想ですから、子どもたちには「子どもにもわかる佐伯の観光ガイドブックをつくりたい」という思いを持ち続けさせることが大切になります。

しかし、各教科等の目標も当然大切です。そこは、教師が各教科等のねらいをしっかりと把握して対応しなければなりません。

教師のコーディネート力が求められますが、チャレンジする価値はきっとあると思います。

＜ちょっと関連型＞

プロジェクト型まではいきませんが、総合的な学習の時間の活動の一部を教科学習で対応する方法です。たとえば、食育の取り組みの調理や栄養の場面を家庭科で実施する方法などが考えられます。

Q 5 国語の単元を貫く言語活動との関連は、どのようにしたらいいのでしょうか。

A

- 総合的な学習の時間と「単元を貫く言語活動」の共通点は、「相手意識・目的意識」が明確でなければならない点です。

- Q3で多様な表現方法があることを紹介しましたが、その中で「話す」「書く」ことは、特に関連させやすいというより、関連させるとより効果的ではないかと思われます。
なぜなら、表現しようとする際には、すでに相手意識・目的意識があるのですから、当然主体的に表現しようとするはずで、しかも、プロジェクト型のように時間もたっぷり使えるのですから、腰を据えた取り組みが期待できます。

- ただし、教師が無理に関連づけると意欲を低下させてしまいます。子どもたちの意識を持続させながら接続な円滑を図ることが大切になります。

- なお、国語における単元を貫く言語活動は、教科としての位置づけから、基本的には全員に同じ表現手法を学ばせることになります。したがって、多様な表現方法を学ぶ機会としてとらえるのではなく、効果的な表現方法のスキルを向上させる場として位置づけたほうがよいと思われます。
いずれにしても、本格的な取り組みは始まったばかりですので、実際には実践を通してより効果的な関連のさせ方を探っていくことが今後必要になると思います。

Q 6 ゲストティチャーなどの外部人材は、どのように探して対応すればいいのでしょうか。

A

○ 総合的な学習の時間の魅力の一つは、学びが学校の外でも展開されるということです。そして、その場には必ず子どもたちに驚きや感動を与えてくださる専門家(本物)が存在するのです。私たち教師では教え、実感させることのできない本物の力は、子どもたちの活動エネルギーを生み出します。ですから、活動の中に本物が登場しない総合的な学習の時間は考えられません。

○ 専門家を見つけるには、

①教師自身が探す。

②周囲の方に情報を得る。

③地域協育コーディネータに依頼する。

等の方法が考えられます。

①は、最も大切な方法です。教師自身が「やってみたい」と感じる必要条件を具備するためには、「まず自分で」ということになるからです。また、そのためには日頃から自分のアンテナの感度を上げておく必要があります。

②は、一般的な方法です。①よりも多くの情報を得ることができます。しかし、その後の整理・分析を忘れると、活動の目的に合わないということも考えられます。最後は、自分で確かめる必要があります。

③は、中学校区に配置されているコーディネータに活動の内容や目的を知らせて、探してもらう方法です。多くの情報と人脈があるので、効果的だと思います。

○ 専門家の方は、教師の本気度を見えています。依頼はしたが、ただお任せでは、その後の連携は難しくなります。常に教師が主たる指導を行い、専門家の出番を明確にしておかなければなりません。しかし、積極的に活用することで、子どもだけでなく、教師自身もきっと楽しくなるはずです。

Q 7 総合的な学習の時間を意識した教室環境をつくるには、どこに気をつければいいのでしょうか。

A

- 探究的な学習プロセスで活動で進める総合的な学習の時間においては、活動の目的を見失わずにおくためにも、その足跡を可視化しておくことが重要です。
- その際、できるだけ子どもたちが学習活動の中で取り組んだものを写真等を使って残すようにしましょう。教師がつくったものだけで残すと、子どもたちにとっては「自分ごと」とは言えなくなります。
- また、他の教科等の掲示もありますし、ユニバーサルデザインの視点もあるので、あまり多すぎるのもどうかということになります。
- 教室掲示の他には、ポートフォリオや活動の参考となる図書など、子どもたちの活動を後押しする環境作りも大切です。特に、今後の活動に生かせるような資料等を何気なく教室において、子どもたちに気付かせるような仕掛けは、「先生がくれた」ではなく「自分で見つけた」という意識にさせる効果もあります。
- 環境づくりの場を教室に限定するとできることは狭まります。学校として総合的な学習の時間コーナーをつくるなど、空間を開くことも重要です。
- また、教室環境はものだけでなく、活動できる場所、道具、雰囲気等と総合的に見る必要があります。「したいことがすぐできる」環境とはどんなものかを考えると良いのではないのでしょうか。

Q 8 総合的な学習の時間でコンピュータなどのICT機器はどのように活用すればいいのでしょうか。

A

- 総合的な学習の時間の活動にICT機器は欠かすことはできないと思います。まず考えられる活用方法は、インターネットによる情報の収集やプレゼンテーションソフトによる発表です。これらは、これからの社会に必要な力ですので、総合的な学習の時間だけでなく、様々な場面で活用していく必要があります。
- その他にも、写真等の収集データを保管したり、記録カードを作成・保管するポートフォリオやデータベースとしての活用、他校や外部とメールやSNSなどを使って連絡をするためのツールとしての活用など、用途は様々です。
- ただし、あくまでもICT機器はツールであることを忘れないように しましょう。使うことが目的となってしてしまうと、「インターネットの使い方」だけで、目的もなしに時間設定をしてしまいます。ひどい場合は、それが総合的な学習の時間の年間指導計画に堂々と記されていることさえあります。こうなってしまうと、本末転倒としか言えません。
- また、最近はタブレット型情報端末が主流となりつつあります。使い方を理解すれば、ICTの活用場面が一段と増えていくと思われます。
- 基本はアナログです。しかし、限られた時間でより効果的な教育活動を行うために積極的にICTを活用することにも挑戦してみましょう。

ひとりごと

みなさんが担任している子どもたちに、「情報にはどんなものがある」と聞いたら、何種類出せますか。ICT機器は視覚と聴覚から得る情報ツールです。触覚、臭覚、味覚はやはりアナログですよ。

Q9 総合的な学習の時間の評価はどのようにすればいいのでしょうか。

A

- 総合的な学習の時間が教育活動である限り、それを評価することは必要不可欠になります。しかし、何の視点(規準)もなしに評価することはできません。そのためにも、「付きたい力」をしっかりと設定しておく必要があります。これに基づいて子どもたちの活動の様子(観察)や表現したもの等で評価していくことになるのです。
- ただし、総合的な学習の時間では次のような点に留意してください。
まずは、「できるようになった評価」です。できないことに目を向けるのではなく、活動を通してできるようになったことに目を向けることが重要です。
次は、「個人内評価」です。もともとスタートラインが異なる子どもたちですから、「付きたい力」を一律の視点にするのではなく、子どもによって基準となる視点をかえることが必要です。
次のステップに高めるような支援を行いながら評価すれば、子どもたちへの言葉かけも自然と「プラス思考」となるのではないのでしょうか。
そして、「その都度評価」です。活動後にまとめて評価するのではなく、活動の途中に気付いたことをその都度子どもたちにフィードバックすることで、子どもたちは自分の取り組みを見つめ直すきっかけとなるのです。
- いずれにしても、テストの点数のような客観的な資料よりも教師の主観に比重が置かれますので、プラス思考の評価をしていく意識を持つことが、子どもたちの成長につながるのだと思います。

ひとりごと

指導要録に「～ができるようになった。」などの結果だけを記述していることを見かけますが、できれば「～などの活動を通して、○○のような見方をするなど、多面的なものの見方が育ってきている」のようなプロセスを大切にされた表現を意識してほしいと思います。

Q 10 思考ツールはどうやって手に入れればいいのでしょうか。

A

○ 方法は2つあります。

一つは、既製品を購入するということです。しかし、まだあまり多く出回っていないので、探すのも大変ですし、値段も高いと思います。

もう一つは、自分たちで作るということです。

○ 思考ツールは子どもたちがグループで話し合いを進めるためのツールですから、人数に応じた大きさが重要です。例えば、2～3名であればA3程度の大きさが十分なので、クリアファイルやラミネータで簡単に作ることができます。しかし、5～8名ではA2サイズくらいはないと十分な活動はできにくくなります。

渡町台小学校では、ホームセンターで販売している1畳分程度のビニールボードを6等分して、それにホワイトボードマーカーが使える市販(教材カタログ)のシートを張り付けて作っています。必要に応じて、中に座標軸やベン図などを入れておくこともできるし、説明する際にも大きくて見えやすいのでとても便利です。

○ いずれにしても、「使える思考ツールがほしい」という課題に対して、先生方が情報を集め、整理・分析し、具体的なツールづくりに表現していくという教師にとっての探究的な学習プロセスでもあるので、それぞれの学校規模や用途に合わせて検討してみましょう。できれば、その情報を交換できると、みんなが助かりますよね。

ひとりごと

H26の全国学力・学習状況調査に思考ツール(座標軸)が出題されていましたが、4つの選択肢がすべて異なる思考ツールを表現していたことに気が付きましたか。選択肢1はマトリクス表、2が正答で座標軸、3がランキング、4がウエビングでした。

そこまで気がつけば、普段から「私は思考ツールを使っている」と言えるでしょう。

Q 11 総合的な学習の時間の実践は、学力向上につながるのですか。

A

○ 結論は「YES」です。

総合的な学習の時間は、もともと「知の総合化」ということで導入されました。つまり、各教科等で得た知識、身に付けた技能、高めた思考力・判断力を使って、自分たちの力で課題解決していくことで、それらを実際に駆使できる子どもたちに育てたいとの願いがあるのです。実際に、全国学力・学習状況調査の結果からも、総合的な学習の時間に対する児童の意識と学力に関する検査結果には相関関係があることが明らかになっています。

基礎編にも記述していますが、「教えられたこと」ではなく「学んだこと」だからこそ、子どもたちにとって大切なのです。

○ また、それを下支えするものとして、「関心・意欲」の力も大きいと思います。総合的な学習の時間で得られた達成感や成就是、児童の自信となり、他の教科等の関心や意欲へと広がります。それらが好循環するスパイラルを作っていくことが重要なのです。

○ 人は、欲しているときにだけ外から吸収しようとしています。そうであれば、子どもたちが「欲する状況」をつくること必要です。その場として最も有効に活用できる、活用しなければならない教育活動の場こそ総合的な学習の時間なのです。

ひとりごと

総合的な学習の時間は、学力だけでなく、その基盤となる学級づくりのも大変有効です。なぜならば、協同的な学習が中核にあるからです。自分勝手な活動では課題解決は進みません。しかし、子どもたちが本気になれば、少しずつ他者と強調しながら活動に取り組むよう変化してきます。また、課題を解決したいので、教師の助言を真剣に受け止めようともします。それらの中で、子ども同士や子どもと教師の関係が改善される効果も期待できます。生徒指導で困っているのなら、総合的な学習の時間をぜひ大切にしてみましょう。

Q 12 「思考力とはどんなものか？」と聞かれてもすぐにこたえられないのですが、どうとらえればよいですか。

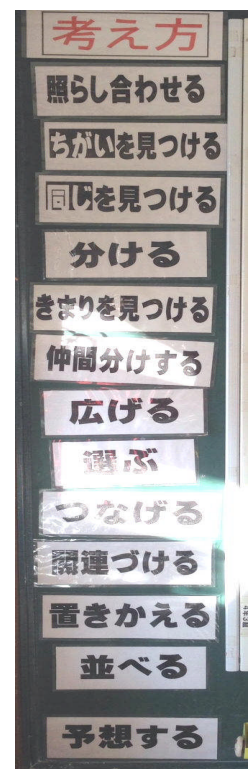
A

○ よく思考力という言葉を使いますが、具体的にといわれるとすぐには出てこないことがよくあります。それは、私たちの日頃からの意識が不十分だからです。また、具体的に意識していないのであれば、授業の中で子どもたちの思考力を育てようとしても、その手段がなかったり、見取る視点がなかったりということになります。

○ 右の写真は、渡町台小学校の中学年の教室に掲示しているものです。「思考」の中身を具体的に出し合って作りました。つまり、渡町台小学校が考える「思考力」ということになります。

このように、具体的な言葉にして教室に掲示することで、教師だけでなく、子どもたちにも「思考(考える)」について意識させてみるのも一つの方法だと思います。

○ いうまでもありませんが、思考ツールを使う際には、「どんな思考をさせたい(する必要がある)」ということが明確でなければふさわしいツールを使うことはできません。



ひとりごと

子どもたちが自分の考えを発表したら、すかさず掲示している思考力と関連付けて、「今の考えは○○さんの考えとつないだんだね。」というように、日頃から子どもたちに意識的に投げかけることが大切だと思います。そうすることで、子どもたちは場に応じて考える(思考する)力をつけていくのだと思います。